様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００１９０

研究課題名（和文）東南アジアの美術とナショナル・アイデンティティ

研究課題名（英文）Southeast Asian Art and National Identities

研究代表者
後小路　雅弘（USHIROSHOJI, Masahiro）

九州大学・人文科学研究院・特任研究員

研究者番号：５０３５９９３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：「コロキウム：東南アジアの美術にみる自己像と他者像」をはじめ5回の研究会を開催し、内外の研究者と本研究テーマに関する議論を深めた。また、シンガポールでチュア・ミアティ展を調査したのをはじめ、ジャカルタなどインドネシア4都市を回り、東南アジア近代美術作品とナショナル・アイデンティティの関係という観点から、実例を調査した。とくにナショナル・モニュメントについて調査した。同時に、本研究テーマの問題意識の端緒になった1978年の最初の調査を考察するため当時の存命の関係者にインタビューした。これらの研究成果については報告書にまとめ、公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東南アジアの近代美術史研究については、おおまかな各国別の美術史の語りは定説として存在するものの、より深い問題意識に基づいた研究、実証的な研究、あるいは個別の作家、作品研究はまだ少ない。また既存の「定説」に関する批判的な検証も端緒についたばかりである。本研究は、「ナショナル・アイデンティティ」という観点から、東南アジアという地域における近代美術に共通する問題意識を深化させたところに学術的意義がある。同時に、日本近代美術と比較することで、日本近代美術史においてはあまり問題として意識されないナショナル・アイデンティティと美術作品の問題を顕在化させる意義もある。

研究成果の概要（英文）：We held five symposiums, including the Colloquium: Self and Other in Modern Art of Southeast Asia, and deepened discussions on this research theme with researchers in Japan and abroad. In addition, I investigated the Chua Mia Tee Exhibition in National Callery Singapore and traveled to four cities in Indonesia, including Jakarta, to study examples of the relations between modern art and national identity in Southeast Asia. Inparticular, I investigated national monuments. At the same time, I interviewed persons who were still alive at the time of my first visit to Southeast Asia in 1978, which was the beginning of our awareness of the issue of this research theme. The results of this research were compiled in to a report and published.

研究分野：東南アジア近代美術史

キーワード：ナショナル・アイデンティティ　美術史　東南アジア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者は 1978 年 12 月から翌年にかけて 2 か月間ほど、初めて東南アジア 5 か国の美術調査を行い、美術家たちと話す機会を得た。日本においてはまだ誰も東南アジアの近現代美術に関心を持たない時代の貴重な経験であったと改めて思う。その時、美術家たちが異口同音に「ナショナル・アイデンティティ」という言葉を発し、議論していたことを覚えている。研究者としてのスタート地点にあった申請者は、未熟なためこの問題を十分に理解したとは言えない。その後、福岡市美術館、福岡アジア美術館の学芸員として 24 年、九州大学の教員として 17 年、合計 40 年余り東南アジアの近現代美術の日本への紹介、研究、教育に関わってきた。この間「東南アジア―近代美術の誕生」展（福岡市美術館　1997 年）や「アジアのキュビスム」展（東京国立近代美術館　2005 年）、「ベトナム近代絵画展」（東京ステーション・ギャラリー　2005 年）などの企画に関わり、展覧会図録掲載の論文に「ナショナル・アイデンティティ」を含む「ナショナリズム」と美術の関係について論述した。また、「東南アジア美術におけるモダニズム」や東南アジアにおける美術史学の形成、アジアにおけるゴーギャン受容、日本軍政の東南アジア美術への影響などのテーマで研究する際にも、ナショナル・アイデンティティとの関係が念頭にあった。しかし、その問題に正面から取り組むことはこれまでなかった。

いま、研究生活の最後の局面を迎え、初心に帰り、あらためて東南アジア近代美術史の根幹をなす問題である「ナショナル・アイデンティティ」と美術とのかかわりについて、作品に即して具体的かつ実証的に検証し、考察し、その成果を形にしたいと考える。

２．研究の目的

東南アジア地域で、現在の国民国家の形が確定するのは、1950 年代から 60 年代のことであった。その東南アジア諸国の美術を担った美術家たちは、一方でモダンアートの普遍性を求め、他方で故郷を再発見していく。また、東南アジア諸国の国境線は、どの国の植民地であったかを基盤に引かれたものであり、同一性が脆弱であったため様々な文化の領域でナショナル・アイデンティティを探求し確立することが、新しい独立国家の国家的な要請でもあった。

独立間もない東南アジア諸国の近代美術は、ナショナル・アイデンティティの探求と形成という国家的要請と深くかかわりながら展開していったと考えられる。また、欧米の造形主義的なモダンアートの普遍性と、地域の個別性どのように表現していくのかという問題は、ナショナル　・アイデンティティと美術家個人のアイデンティティの問題とも絡んで、東南アジアのみならず、植民地を経験した非欧米圏の国々の美術家が　ともに直面する課題でもあった。

東南アジア諸国の近代美術家たちが、国家の独立と脱植民地化を背景に、ナショナル・アイデンティティの形成という国家的要請をどのように受け止め制作に反映させたのか、また普遍性への希求と故郷の再発見といった画家個人の内面的な問題とナショナル・アイデンティティはどのようにかかわっていたのかについて、1950 年代から 70 年代までの各国の美術家たちの具体的な例を検証し、明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

2015 年 11 月に開館したナショナル・ギャラリー・シンガポールは、東南アジア近代美術

史を常設展示するほか、注目すべき特別展を企画開催している。なかでも 2016 年に英仏ふたつの代表的な美術館と共同で企画したふたつの展覧会–「美術家と帝国」展と「モダニズムを再編する」 展–は、とりわけ興味深いものであった。テート・ブリテンとポンピドゥ・センターがそれぞれ開いた展覧会を、被植民地側から編み直すというポスト・コロニアルな問題意識による意欲的な試みであった。こうした研究動向を踏まえ、長年研究協力し、問題意識を共有してきたナショナル・ギャラリー・シンガポールの東南アジア近代美術史を専門とするシニア・キュレーターの堀川理沙とセン・ユージン(SENG Yu Jin)の協力を得て、上記の展覧会の知見を取り入れながら研究を進める。具体的な進め方としては、東南アジアの独立前後の美術作品を比較検証し、ナショナル・アイデンティティとの関係について精査する。あわせて、美術家をはじめとする関係者への聞き取り調査を行うとともに、関係文献の収集と読解を行う。また、この美術におけるナショナル・アイデンティティの問題については、ユネスコ傘下の IAA 国際造形連盟が 1973 年のソフィア（ブルガリア）総会における決議–世界の美術家はそれぞれの地域のアイデンティティを検証する—が重要なメルクマールとなっている。すでにパリ・ユネスコ本部での資料収集を行ったが、その資料の精査、考察を進める。 最終的に、当該テーマによるシンポジウムの開催と報告書を発行し、その成果を公にする。

４．研究成果

コロナ禍の状況の中で、当初の計画通りに海外調査を進めることはできなかったが、その分、研究会を充実させ、５回の研究会を開催し、内外の研究者と議論 を深めることができた。 最終年度は、７月に民族藝術学会の例会担当理事として研究例会を開催、モデレーターを務め、本科研の研究テーマに関わる「東南アジア近代美術の対外表象とナショナル・アイデンティティ」というテーマで、内外の研究者と議論を深めた。後半には海外調査も可能となり、11 月にシンガポールのナ ショナル・ギャラリーにおける「チュア・ミアティ展」を始めとする展覧会を調査し、関係者と議論することができた。またその調査をふまえ、1 月にナショナ ル・ギャラリー・シンガポールの学芸員 3 名を招いて「コロキウム：東南アジアの美術にみる自己像と他者像」を開催し、シンガポールを始め東南アジア近代美術におけるナショナル・アイデンティティと美術との関係について議論を深めた。また、3 月にはインドネシア 4 都市を訪問し、インドネシア近代美術におけるナショナル・アイデンティティの問題について、関連する作例を広く調査した。

わたしは、1978 年に初めてインドネシア他東南アジア諸国を調査したが、その調査の際にナショナル・アイデンティティと美術に関する問題意識を得た。今回、実際の作例を調査すると同時に、1978 年の自身の調査が持つ意味について、当時 会った関係者のうち存命している人物に可能な限り面談し、当時の文脈について話し合うことができた。

3 年間で開催した４回のコロキウムを中心に、その記録を報告書の形にまとめ、海外調査の関連資料を付して、本年度末に刊行することで、一応の研究成果を公開することができた。東南アジアの近代美術が、ナショナル・アイデンティティと密接な関係の下に展開されたことを、様々な実例とともに示すことができた。また、この問題に関し、日本の近代美術を東南アジアの場合と比較することで、日本の近代美術におけるナショナル・アイデンティティの問題という、あまり議論されない問題を顕在化させ、検討することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 後小路雅弘	４．巻 48
２．論文標題 中国の村に立つ英国の樹　追悼中村英樹先生	５．発行年 2022年
３．雑誌名 藝術批評誌【リア】	６．最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後小路雅弘	４．巻 2号
２．論文標題 「牛島光太郎―はなしのあとのはなし」展始末記	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アジア 近代美術研究会会報しるぱ　増刊　　とかげ通信	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後小路雅弘	４．巻 7
２．論文標題 ミャンマー美術瞥見	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アジア近代美術研究会会報しるぱ	６．最初と最後の頁 39-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後小路雅弘	４．巻 7
２．論文標題 美麗島縦走記	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アジア近代美術研究会会報しるぱ	６．最初と最後の頁 41-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後小路雅弘	4．巻 1
2．論文標題 建畠覚造訪問記	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アジア 近代美術研究会会報しるぱ　増刊　　とかげ通信	6．最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後小路雅弘	4．巻 60巻1号
2．論文標題 書評　ベトナム近代美術史―フランス支配下の半世紀	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東南アジア研究	6．最初と最後の頁 94‐97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 後小路雅弘
2．発表標題 アジア美術のナショナリズム―《想像の共同体》再読
3．学会等名 第50回アジア近代美術研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 後小路雅弘
2．発表標題 1930年代東南アジアの美術と『国民／国語／国土』の誕生
3．学会等名 第51回アジア近代美術研究会
4．発表年 2022年

１．発表者名 後小路雅弘
２．発表標題 Visit to the ITB in 1978, at the beginning of a trip to look for Indonesian art
３．学会等名 The International Conference on Aesthetics and Sciences of Art AESCIART（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 後小路雅弘
２．発表標題 Art in Southeast Asia under the Japanese Occupation 1942-45
３．学会等名 The Fourth Liu Kang Annual Lecture | Refracted Images: Art During the Japanese Occupation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 後小路雅弘
２．発表標題 体験としてのアジア美術とナショナル・アイデンティティ
３．学会等名 第49回アジア近代美術研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 後小路雅弘
２．発表標題 東南アジアの近代美術―ナショナル・アイデンティティをめぐって
３．学会等名 第53回アジア近代美術研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
コロキウム：東南アジアの美術にみる自己像と他者像	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関